

目 次

はじめに	1
第1章 カリキュラムの考え方	3
【ふくい18年教育 コンパス（羅針盤）】	8
第2章 10の姿が育つプロセス	9
1 【10の姿が育つプロセス】の考え方	10
2 【10の姿が育つプロセス】	11
第3章 遊びのプロセス	12
1 【遊びのプロセス】の考え方	13
2 子どもの育ちを「遊び」から捉える【遊びのプロセス】	
(1) 運動遊び編	15
(2) なりきる編	16
(3) 不思議編	17
(4) 言葉遊び編	18
(5) つくろう編	19
3 行事から捉える子どもの育ち	
(1) 遠足	20
(2) 運動会	21
(3) 生活発表会	22
4 【遊びのプロセス】を踏まえた保育者・教師の支援例	24
第4章 接続に向けた取組	35
「連携」と「接続」－網の目のようにつなぐー	37
1 子どもをめぐる情報の伝え合い	38
2 子ども同士の交流	40
3 保育者・教師による相互理解	43
4 子どもの学びをつなぐ環境構成の工夫	48
5 教育課程の構築	50
【架け橋カリキュラム 構想シート 例】	63
【架け橋カリキュラム あしあとシート 例】	65
【接続推進活動計画 ～1年間の見通し～】	67
第5章 自己発揮する子どもの姿の実践事例	68
『子どもの姿を協働で捉え直して、保育の専門性を高める』	69
福井大学連合教職大学院 教授 岸野 麻衣	
『0・1歳児～1年生 実践事例』	78
おわりに	105
参考文献	106

はじめに

福井県では、平成24年11月に福井県幼児教育支援センターを開設しました。幼稚園・保育所・認定こども園が横につながり、幼児教育施設・小学校・中学校・高等学校が縦につながる、連携・接続の充実を目指し、様々な取組を行ってきました。

平成27年には、福井県の幼児教育から小学校教育への接続の在り方を示した「学びをつなぐ希望のバトンカリキュラムー学びに向かう力をはぐくむー」を策定しました。「学びに向かう力」の育成に重点を置き、接続を意識して「5歳児が遊びで経験する内容」を明確化したことが特徴です。また、県内すべての小学校区ごとに、「接続推進計画」を作成する中で、幼稚園・保育所・認定こども園と小学校がお互いの教育について理解しようと、子どもたちの交流活動をはじめ、小学校教諭（以下、教師）による保育参観、幼稚園教諭・保育士・保育教諭（以下、保育者）による授業参観が徐々に広がり、幼小連携の土台がつくられてきました。

その後、平成29年3月に告示された、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領（以下「幼稚園教育要領等」）の改訂（改定）により、3歳以上の「ねらい及び内容」をはじめ、幼児教育に関する記載がおおむね共通化されると共に、「幼児期において育みたい資質・能力」および「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が示されたことを受け、福井県として、「従来のカリキュラをより長い育ちのつながりが見えるものにしたい」「更に実践に役立つ具体的なものにしたい」という願いをもち、平成31年、「学びをつなぐ希望のバトンカリキュラムー学びに向かう力を発揮するー」を改訂しました。作成にあたり、市町幼児教育アドバイザー・園内リーダー養成研修受講者・認定者や接続推進モデル地区の先生方から実践事例を提供いただき、実践化しやすい内容としました。中でも、福井県が独自に作成した「10の姿が育つプロセス」「遊びのプロセス」は、従来の「全体カリキュラム」「内容カリキュラム」で示したコンテンツベースのものから、コンピテンシーベースのものとして表せないだろうか工夫し作成しました。具体的な子どもの姿で育ち・学びのつながりを示したことで、園内研修や接続推進会議の中で対話のツールとして積極的に活用されています。

一方、使っていく中で見えてきた課題として、「3歳児以上だけでなく、0・1・2歳児の遊びのプロセスについても記載してほしい」「幼児教育から小学校教育へ教育課程を接続するための具体的な手立てを知りたい」「0歳から18歳までの育ち・学びには連続性・一貫性があることを社会全体で共有したい」など、ステップアップを期待する声が聞かれるようになりました。

そこで、これまでの取組を継承しつつ、自己発揮し遊び・学び続ける探究者の育成を目指し、令和7年3月「学びをつなぐ希望のバトンカリキュラム『ふくい18年教育』」を策定しました。

今回改訂されたカリキュラムが、これまで同様、幼稚園・保育所・認定こども園と小学校の先生方、ならびに、子どもに関わる多くの方々に活用されることを切に願うものであります。

福井県では、幼稚園・保育所・認定こども園は、いずれも幼児教育を行う施設として位置づけられていることを踏まえ、「幼児教育から小学校教育への接続（幼小接続）」と表しています。

年 月	変 遷
平成24年11月	幼児教育支援センター開設 県内5つの保幼小接続モデル地区で実践研究（～26年度）
平成26年3月	国は次期学習指導要領の検討会議で、「保幼小接続の在り方」を示す 保幼小接続講座 開始（現：幼小接続講座）
平成27年3月 4月	福井県保幼小接続カリキュラム策定 「学びをつなぐ 希望のバトンカリキュラム～学びに向かう力をはぐくむ～」 市町幼児教育アドバイザー・園内リーダー養成研修 開始 ※ スタートカリキュラム講座 開始（～30年度）
平成29年3月	「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」 が改訂され、3歳以上の幼児教育に関する記載が共通化
平成31年2月 3月	スタートカリキュラム研修会 開始（嶺北・嶺南 令和元年度より各市町） 福井県保幼小接続カリキュラム改訂 「学びをつなぐ 希望のバトンカリキュラム～学びに向かう力を発揮する～」
令和2年10月	家庭教育支援講座 開始
令和4年3月	国は「幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会」を設置し、 「幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き」を示す
令和7年3月	福井県保幼小接続カリキュラム改訂 「学びをつなぐ 希望のバトンカリキュラム 『ふくい18年教育』」策定

※令和7年3月末 市町幼児教育アドバイザー認定者253名、園内リーダー認定者954名

福井県幼児教育支援センター推進事業

幼児教育の質向上

市町や園での幼児教育推進者養成や
園内研修をサポート

- ・市町幼児教育アドバイザー養成研修
- ・園内リーダー養成研修
- ・市町幼児教育アドバイザーフォローアップ研修
- ・園内リーダーフォローアップ研修
- ・市町訪問講座
- ・県幼児教育アドバイザー訪問

市町・公私・学校種を越えて

幼児教育から 小学校教育への接続

園と小学校の先生方が子どもの姿を
理解し互いに学び合う場を支援

- ・幼小接続講座
- ・架け橋カリキュラム研修会

家庭教育力向上の支援

家庭教育アドバイザーが
つながり合う子育てをサポート

- ・出前家庭教育講座
- ・家庭教育支援講座

第 1 章

カリキュラムの考え方

学びをつなぐ 希望のバトン カリキュラム「ふくい18年教育」に込めた願い

未来を創る子どもたちは、大人が自分たちにどんなバトンを託そうとしているのか、不安と期待の眼差しで私たちを見つめています。

令和3年1月の中央教育審議会答申「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～」や、令和4年3月幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会により「幼保小の架け橋プログラム実施に向けての手引き」が示されるなど、学習指導要領の実践化が加速しています。これらに共通しているのが「学びの主体は子どもである」ということです。

開設10周年を迎えた福井県幼児教育支援センターでは、これまでの成果と課題を踏まえ、「0歳から18歳自己発揮し遊び・学び続ける探究者」の育成を目指したいと思います。

変化の激しい時代だからこそ、ゴールの書かれた地図ではなく、自分のコンパスをもち未来を拓く探究者になってほしいと考えました。

「なぜ0歳からなのか？」それは、乳幼児期の子どもにとって「遊び」は、問いや発見、ときどきわくわくする探究の宝庫であり、遊びそのものが「学び」だからです。誕生から、安心して存分に心を動かし遊び込む経験を重ねて、少しずつ探究者が目覚めていくのです。そして大人になるまで学び続けるためには、幼児期の学びの芽生えを、小学校以降でもしっかりと発揮できるよう教育課程をつなぐことが重要です。

そこで、今回のカリキュラムでは、8ページ【ふくい18年教育 コンパス（羅針盤）】の上部に、0歳から18歳までの探究的に学ぶ姿を表しました。子どもに関わる全ての大人が、この歩みを共有し、子どもの学びの伴走者となっていくことが理想です。

子どもたちは一人一人が豊かな環境の中で、主体的に人・もの・ことに関わりながら遊ぶ（学ぶ）ことができる、有能な学び手です。

子どもが学びの主役となり生き生きと自己発揮するためには、大人が「子ども理解に基づいた自己発揮できる環境づくり」をしていく必要があります。

幼児教育では、遊びを通して資質・能力が一体的に育まれるという特徴から、自然と「個別最適な学び（遊び）…幼児一人一人の特性、発達の課題に応じた援助に支えられた活動」と「協働的な学び（遊び）…友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したり、充実感をもってやり遂げようとする活動」が、展開されてきました。

教育改革のために様々なアプローチがありますが、子どもと関わる全ての大人が、幼児教育の原理を学ぶことは、主体的・対話的で深い学びを実現する効果的な一手であると実感しています。

ぜひ、このカリキュラム「ふくい18年教育」をいっしょに開いて、教育を再考してみませんか。

0歳から18歳までつながる 資質・能力の3つの柱

福井県では、令和6年10月に「教育に関する大綱」を改定し、本県教育の目指す姿として、「一人ひとりの個性が輝く、ふくい未来を担う 人づくり～子どもが主役の「夢と希望」「ふくい愛」を育む教育の推進～」という基本理念を定めたところです。

大綱の中では、県が重点的に育成を目指す資質・能力として、5つの「伸ばすべき力」を示しました。

- 1 思考と行動の基礎となる**学力・体力**
- 2 好奇心をもって学びを深める**探究力**
- 3 他者と協働する**共感力・対話力**
- 4 ふるさとの未来と自らの将来を思い描く**キャリア形成力**
- 5 成長を続けるための**挑戦力**

これらの資質・能力は、「ふくい18年教育」のスタート期から、少しずつ培われ花開く力です。8ページにある「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿）」が学びの芽であり、円滑な教育課程の接続により、子どもたち一人一人に実り「生きる力」となっていきます。

平成29年に改訂された幼稚園教育要領等では、「生きる力」の基礎を培うため、幼児期において育みたい資質・能力として、「知識及び技能の基礎」・「思考力・判断力・表現力等の基礎」・「学びに向かう力・人間性等」の3つを、5領域（健康・人間関係・環境・言葉・表現）を踏まえ、遊びを通しての総合的な指導により一体的に育むことを目指しています。

この3つの資質・能力は、小学校、中学校、高等学校を通して伸びていくものであるという縦のつながりが表され、また、幼稚園・保育所・認定こども園すべての教育要領等の3歳以上の教育に関する記載がおおむね共通化されたことにより、横のつながりも表されています。

幼児期における「知識及び技能の基礎」は、「豊かな体験を通じて、感じたり、気付いたり、分かったり、できるようになったりする」ことで、小学校の学びを先取りすることではなく、遊びや生活の中で気付いたり、できるようになったり、言葉で表現できるようになったりすることです。

「思考力・判断力・表現力等の基礎」は、「気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする」とされています。遊びや生活の中で気付いたりできるようになったりするプロセス、つまり、試行錯誤したり話し合ったりする中で培われる力です。

「学びに向かう力・人間性等」とは、「心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする」ことで、「知識及び技能の基礎」や「思考力・判断力・表現力等の基礎」を育む最も土台となる資質・能力です。

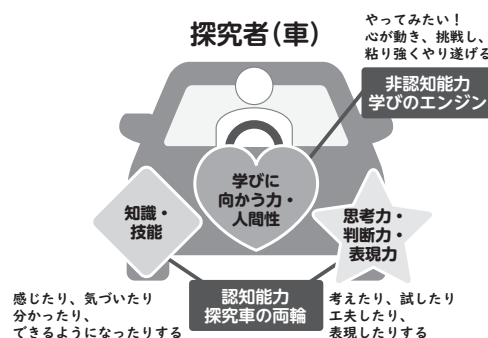
幼児期においては、資質・能力の3つの柱は、子どもの自発的な活動である遊びや生活の中で、感性を働かせてよさや美しさを感じ取ったり、不思議さに気付いたり、できるようになったことなどを使いながら、試したり、いろいろな方法を工夫したりすることなどを通じて育まれていきます。小学校以降になると、資質・能力は、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」として発展していきます。

資質・能力が駆動する探究者

「主体的・対話的で深い学び」の実現には、「(先生が)何を教えるか」という視点から、「(子どもが)何ができるようになるか」という学習者の視点への、教師の学習観の転換が欠かせません。子どもに培われていく3つの資質・能力は車をイメージすると捉えやすくなります。

車が走るために最も重要な学びのエンジンとなるのが、「学びに向かう力・人間性等」です。左右の両輪は、「知識・技能」と「思考力・判断力・表現力」です。片方だけでは動きませんし、どちらか一方だけが大きくなっても車は傾いてしまいます。学びのエンジンで駆動する両輪の資質・能力がバランスよくつながり合って育っていくのです。しかし、車だけでは動きません。探究者が、向かう方向を定めハンドルを握り、車を乗りこなし、世界を拓いていくイメージです。

幼稚園・保育所・認定こども園でそれらの基礎が培われ、小学校以上では、教科等の指導により成長していきます。身近な環境に関わる活動の充実から、子どもは、いろいろなことに気付き、考えたり工夫したりし、さらにやってみたいことが生まれ、それを追究し、やり遂げようとします。気付きは互いに結びつき、少しずつ様々な対象についての関わり方の知識となっていきます。工夫することは、どうしたらよいか迷う場面や、なぜそうなるか不思議に感じる場面で広く深く考える力となって発展していきます。興味や意志の力は、身の回りのたくさんの事柄や活動へと生かされていきます。それが資質・能力の3つの柱の成長なのです。



カリキュラムの2つの意味

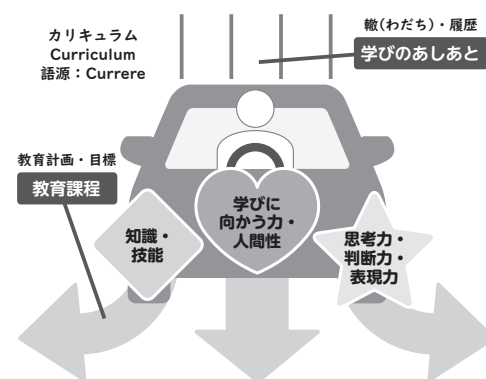
一般的に、カリキュラムとは「教育課程」や「全体的な計画」を指す言葉です。そのため、子どもが学ぶ目標を達成するために園や学校がどのような教育計画を設定するか、という指導者の視点で語られることが多かったように思います。

しかし、カリキュラムの語源（Currere）は、車が通った後の轍（わだち）という意味があり、学習者の「学びのあしあと（履歴）」という側面があります。

子どもが主体となって学んでいくとき、何を目指して学ぶのか見通しをもつことは大切ですが、自分自身の学びのプロセスはどうであったのか、立ち止まって振り返りながら、よりよい自分を目指していくことも、重要だと考えます。

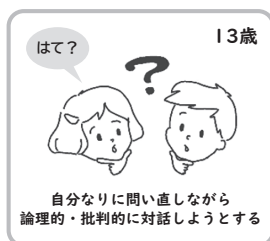
学びを支える保育者・教師もまた、専門性に基づいた意図的な援助や技術をもちつつも、子どもの学びの在り方を考慮して柔軟に再構成していく力が求められています。

そこで、本冊子で示すカリキュラムとは、保育・教育活動の「計画」と「履歴」を含めた「子どもが自ら遊び学ぶ経験」の総体を意味しているものとして、論を進めたいと思います。



探究者としての成長の要！架け橋期に育みたい資質・能力と10の姿

「ふくい18年教育」の実践化に向けて、関係者の間で最も意識したいのは、「0歳から18歳の学びは連続している」ということです。子ども時代のない大人はいませんが、幼少期の記憶の多くを鮮明には覚えていないものです。幼少期の学びは自覚的ではないのですから当然です。そこで、子どもが探究者として成長するためには、周囲の大人が連続性・一貫性があることを共有する必要があると考えました。



例えば、大人にはいたずらのように見える1歳児の姿が中学生の論理的・批判的に対話しようとする姿とつながっていたり、0歳の心地よさと同じように18歳の心理的安全性が社会に踏み出す一步に不可欠だったりします。

そして、その成長の要となる時期が架け橋期です。学びが自覚化していく架け橋期だからこそ、教育課程の接続を図ることで、子どもが遊びながら学び、学びながら遊ぶ主役で在り続けることができるのです。



学びの主体が子どもですから、その教育課程は当然、子ども理解に基づいたものでなければいけません。その手掛かりとなるのが、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿）」です。0歳からの長い育ちを通して、5歳児後半に特に伸びていく5領域の内容を10の視点で整理したものです。幼児教育では、資質・能力は5領域のねらいに反

映され、内容に示された活動の中で育ち、幼稚園・保育所・認定こども園から小学校へ、更にはその先に育まれていきます。その子どもの成長していく様子が、この10の姿を通して示されています。

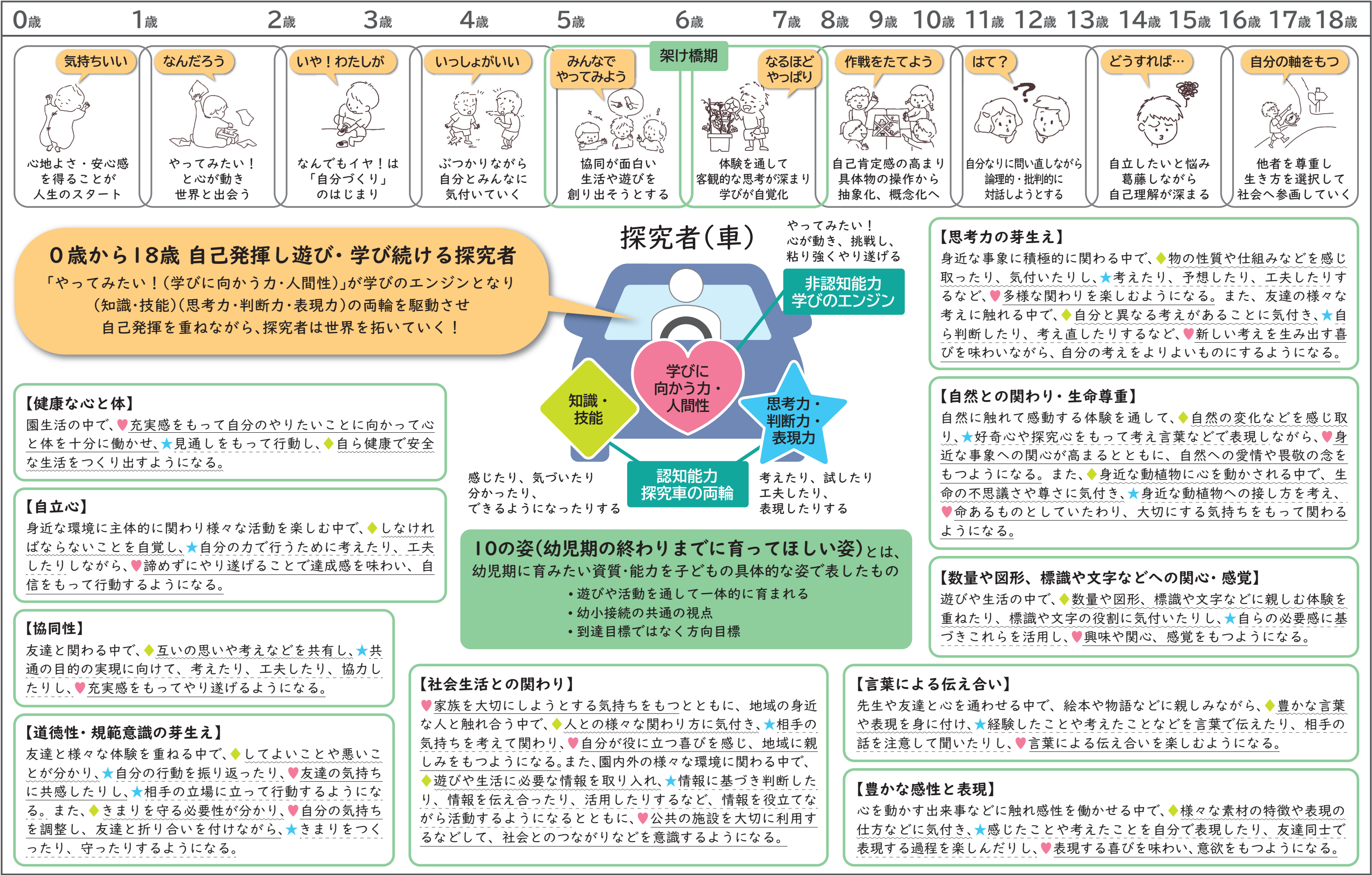
【ふくい18年教育 コンパス（羅針盤）】では、10の姿が3つの資質・能力の視点を踏まえ構成されていることを、3つのマークと下線で示しました。

（♡学びに向かう力・人間性、◇知識・技能の基礎、☆思考力・判断力・表現力の基礎）

幼児期においては、資質・能力を一体的に育むよう努めているので厳密には分けられませんが、3つの資質・能力の視点でも捉えることで、小学校段階以上の先生方や保護者と見方・考え方を共有しやすくする目安としました。

子どもにとっては「遊び」自体が目的であり、何か身に付ける目的のために遊ぶのであれば、それは「遊び」ではなくなります。ですから、決して子どもの姿を資質・能力の視点で切り取るように子どもを見取るのではなく、あくまでも遊び込む子どもの姿を丸ごと受けとめ、「この子は砂遊びの何を面白がっているのかな？」「登って降りる滑り台を何度も繰り返すのはなぜだろう？」と育ちつつある資質・能力を見取る一助としてください。

【ふくい18年教育 コンパス（羅針盤）】～探究者としての成長の要！ 架け橋期に育みたい資質・能力と10の姿～



幼児期・生活科の資質・能力…「学びに向かう力、人間性等」「知識及び技能の基礎」「思考力、判断力、表現力等の基礎」 子ども（探究者）が、どのように資質・能力を発揮しようとしているのか、そのプロセスを見取り、支援する手掛かりに10の姿を活用しましょう